

学生が参加できる団体続々！

注目すべき 新たな教育の胎動

子どもを取り巻く環境が変化し、子ども自身も変化を余儀なくされる時代にあります。子どもを育み支える「教育」「保育」「矯正教育」といった分野も変わり続けています。学生や社会を巻き込んで画期的なチャレンジをスタートさせた4つの団体を紹介します。

取材・文／荒尾貴正（本誌編集デスク）

01 教育困難地域への教師派遣 × Teach For Japan

アメリカンTeach For America
(以下TFA)という教育NPOがあ

る。教育困難地域の学校に、全米トップクラスの大学を出た熱意ある若者

Japan (以下TFJ)として、日本でも展開されることになった。

TFJはアメリカの教育に3つのインパクトを与えていくという。1つは、教師が派遣された地域の子どもたちの学力が実際に上がったこと。2つめは、教師派遣を経験した若者が教育現場に残るケースが多いこと。派遣前のアンケートでは、派遣後に教育の世界に残ると回答するのは6%程度。しかし実際には、66%がその後も携わり続けています。3つめは、残り34%は教育界を離れるものの、「アメリカの教育課題を強

く意識した」リーダーとして各界に散らばっていくことだ。



学習支援事業では成長意欲が高く、情熱ある人材を学校に送り込んだり、地域で学習支援を行う。教師・講師は子どもの問題を解決するなかでリーダーシップが養われる

アメリカンTeach For America
(以下TFA)という教育NPOがある。教育困難地域の学校に、全米トップクラスの大学を出た熱意ある若者を教師として2年間派遣するログラムを90年から開始。子どもの学力を向上させるとともに参加教師はリーダーシップを習得でき、現在5100人を派遣している。これまでの成果が高く評価され、10年全米文系大学就職希望ランキングでは、何と獲得した。この活動がTeach For

08年、ハーバード教育大学院留学中にTFAの存在を知り、日本での展開を決意した松田悠介氏（TFJ代表）は次のように語る。「アメリカの教育格差の解決は、20年前は『絶対に不可能』と言わっていました。しかしTFAが

指してTFJをスタートします」TFJの活動は大きく2つある。ひとつは教師派遣事業で、正規教員・臨時教員や非常勤講師を全国の困難校に2年間派遣する。家庭環境が厳しく学習進度が遅れている子ども

を指導するうえで必要な研修を事前に
を行い、厳しい地域に優先的に送り込
まれる。13年度から本格稼働の予定で
現在各地の教育委員会と調整中だ。

もうひとつは、学習支援事業。生活

保護受給世帯の子どもや東日本大震災で被災した子どもたちを対象に、土日や平日夜間に公民館や学校の教室を使って勉強をみる。こちらはすでに

開始しており、子どもや教育委員会の

反応はすごぶるいいという。昨年東京北区で実施した事業は、北区全体の改革事業のうちベスト1の評価を得た。昨年はTFJ全体で21プログラムを

展開、300人の学生などが参加。日

本もアメリカと同様、トップクラスの大学の学生が参加している。今年は54プログラムを展開する予定。TFJを日本での就職ランキングで1位にすることが当面の目標だという。

02

数学で日本の未来を創造

VV わかり MATH

09年、東京大学の学生と卒業生を中心とした人たちの手により「わかりMATH」という高校数学教育サイトが立ち上げられた。発起者の1人草野元

「は不公平だし、数学が苦手なだけで進路選択が狭まるのは社会的な損失でもあると思ったのです」

（現在は数IAの途中まで）。閲覧は誰でも可能で、無料登録すればスタッフに質問もできる。また現在、小学生が算数のどこでつまずいたのかを発見する「みつけMATH」というシステムも開発中。学校や塾での指導を支援する仕組みとして実用化を目指している。

「社会人になつて2次関数や3次関数を使う人は少ないかもしませんが、そういうものを解くことで培われた論理的思考力や数字リテラシーは、どんな人にも必要ではないでしょ
うか。だからあきらめずに数学に取り組んでいただきたいですね」(吉川社長)

03

学生の子育てインター

▽
スリール

(株式会社わかりMATH社長)は、そのきっかけを次のように語る。「私は中学・高校時代に数学の先生に恵まれ数学がどんどん好きになり、得意になりました。ところが別の先生のクラスでは、みんな『全然わからない』と言つていました。先生によってこんなに差が出るのいる。先生によってこんなに差が出るの

数学嫌いの悪循環を断ち
数学力の底上げで社会に貢献

「MATH」は数学が苦手な高校生にも
わかるように、アニメーションや辞書ペー
ジを多用して高校数学を解説している

に特化したキャリア教育事業も展開中。数学の日（3／14）に数学イベントを企画したり、社会人を対象に数学がいかにビジネスや日常生活に役立つか講演も行っている。今後は中学校や高校などでも行つていく予定なので、講演を希望する学校があれば、ぜひ問い合わせ

数学解説サイト「わかりMATH」。数学が苦手な人のために、考え方や途中式を省略せずに高校数学を解説している

「子育てのサポート」をしてほしい家庭と、「働く」と「家庭を築く」とについて学びたい学生とをつなげるインターンシップ。

「ワーレク＆ティップ・インターナン」という名のこの活動をスリーピル株式会社が10年にスタートした。具体的には、子育て中の共働き家庭を2人の学生が担当。

決まった日に保育所に子どものお迎えに行つたり、家で遊んだり、一緒にこはんを作つて過ごし、保護者が帰宅したらバトンタッチ。週1～2回のインターナルを3カ月間続ける。

学生のほとんどは保育経験がなく、保育士を目指しているわけでもない。将来、仕事もしたいし子どもも欲しい

「（ライフ）を学ぶ「キャリア教育」といえる。現在約100人の学生が自ら登録し、その9割は女性だ。

文教大学4年生の石川麻波さんは、このインターンを体験して自分が大きくなってしまったという。3歳の男の子と打ち解けるための努力は自分と向き合

※ここに取り上げた団体はいずれも、趣旨に賛同する方の参加や、スタッフ、サポートなどを募っています。

関心のある方は、こちらのメールからご連絡してみてください。

Teach For Japan : info@teachforjapan.org わかりMATH : info@wakarimath.com

スリール : info@sourire-heart.com セカンドチャンス! : secondchance234@gmail.com

うことにもつながり、内向きだった性格が積極的になった。数多くの社会人、家庭との出会いも大きな刺激になった。

「子育てだけではなく、仕事も続けることで自分らしくいられ、だから子どもにも120%の愛情を注げる。そんなママたちが、キラキラと輝いて見えました。ああ、自分もこうなりたいなって思いました」(石川さん)

愛情たっぷりの学生を 子どもが待ち焦がれる

「ベビーシッターさんにお願いしていたときは『ママは今度いつ出かけるの?』とお子さんが不安がっていたのが、イン

「とてもありがたく思っています」(スリ

ール株式会社社長 堀江敦子氏)

支援してもらう家庭にもメリットがある。学生は事前に子育てや家族とのコミュニケーションなどに関して入念な研修を受け、インターナン期間も熱心にミーティングが行われる。そのように準備万端の学生が愛情たっぷりに、体力

全開で子どもたちと接するので、子どもたちがお子さんが不安がっていたのが、イン

ターンの学生が行くようになって『お姉ちゃんは今度いつ来るの?』と変わったと言つてくださるご家庭があります。子どももうれしいし、保育者(学生)からも感謝されるし、自分も学びの時間ができると言われる親御さんが多く、

もがよろこばないわけはない。

りが欲しかったし、それは再犯防止にもつながると思うのです」(才門氏)

04

少年院経験者支援ネットワーク

▽セカンドチャンス!

出院者の「居場所」をつくり 再犯を防止する

い、助け合うことが少なかった。

そんななか「セカンドチャンス!」と

欧米には元犯罪者が犯罪者の社会復帰を支援するために立ち上げた団体が数多くあり、その存在もオープンになっていて、当事者だからこそ有効な支援が可能だという考え方も根付いて

いる。そういう団体のサポートとしてスウェーデン国王といった公人や、H & Mなどの大企業が名を連ねることも珍しくない。犯罪を個人や家庭の責任にとどめるのは誤りであり、社会全体で責任を負わなければならないといふ意識が浸透しているのだ。

ここ日本は、犯罪の当事者が過去を明かすのが難しいような空気があるため、これまで当事者同士が知り合

「孤独」は再犯を促すといわれる。少年院を出てたとえ仕事が決まっても、職場で過去のことは話しづらい。周囲と距離ができ、「やっぱり自分をさらけ出せるのは昔の仲間しかいない…」

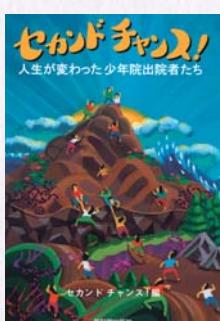
と思つてしまいがち。暴力団や暴走族迎えてくれる。真っ当な世界で、どうや

りが欲しかったし、それは再犯防止にもつながると思うのです」(才門氏)

セカンドチャンス!は、地域ごとの交流会を行つて。現在は東京、大阪、広島など全国6か所にあり、定期的に交流の機会を設けて。そこが出院者たちにとって気の置けない「居場所」であり、新たな出院者を温かく迎える場所ともなる。この交流会をすべての都道府県で開くことを目指して、い



学生はただ子どもと遊ぶのではなく、成長を促すように、社会性が身につくように接する。そのための研修も十分行う



セカンドチャンス!のメンバーが執筆した初の単行本(新科学出版社)。自らの体験と今後の抱負がつづられている